

『もりおかの短歌』

冬の部 優秀賞十首

盛岡の人の優しさ見るごとく
もりおか ひと やさ み

雪あかりの灯
ゆき ひ

ほのかに揺れる
ゆ

盛岡市 中島 久光

擬宝珠の橋を渡りて初参り
ぎぼうしゆ はし わた はつまい

凍れる朝の
こお あさ

息の白さよ
いき しろ

盛岡市 堀米 公子

ユーカラの右手に取りて
ユーカラ ほんて と

金田一博士思えり
きんだいち はかせおも

雪の降る朝
ゆき ふ あさ

盛岡市 西川 政勝

かみ はし ぎぼし うえ
上の橋の擬宝珠の上にも

ゆき つ はつひ う

雪は積み初日を受けて

まちあか

街明るみぬ

盛岡市 石川 修子

みこだ
神子田にて

ふ ふき
しんしんと降りつお雪に

ひ ふたり み
あの日の二人をまぼろしに見る

宮城県亘理町 福田 佳昭

ぎんざ か
銀座ではまだ枯れざるに

たくぼく いえ やなぎ

啄木の家の柳の

いっせい ち

一斉に散る

東京都国分寺市 守屋 明俊

いわてね まむか

岩手嶺に真向ひをれば啄木の

こえかぜ の

声風に乗り

き き

聴こえて来たる

青森県八戸市 鈴木 リヨ

なかつがわ

中津川

みなも

うつ

でんしよく

水面に映る電飾も

せい

よる

ま

聖なる夜を待ちわびている

岩手県矢巾町 小野寺 一洋

たくぼく

かひ

啄木の歌碑に

ふ

ゆきみあ

降る雪見上げいる

われ

ひとり

ゆうじん

我も一人の友人として

秋田県大仙市 鈴木 仁

いてばれ

りん

そび

いわてさん

凍晴に凜と聳ゆる岩手山

み

ひ

し

身を引き締めて

て

あ

手を合わせたり

千葉県印西市 宮本 るり子

平成30年冬の部

ジュニア部門 優秀賞三首

該当なし

〔講評〕

冬の部を担当するのは初めてですが、心のこもった作品が多く寄せられ嬉しく思います。小学生や幼児の作品もあり、入選とはなりませんでしたが、心豊かなものばかりでした。岩手や盛岡、そして啄木に対する思いの深さがどの歌にも表されていて感心いたしました。

平成三十一年三月選 冬の部

投稿数 百九首

選者 山本 豊

『もりおかの短歌』冬の部

〈一般部門〉優秀賞十首

鴨^{かも}たちの

かいわ しろ いき

会話も白い息だねと

なかつがわぞ つうがく あさ

中津川沿い通学の朝

秋田県大仙市 鈴木 仁

寒い朝^{さむ あさ}

せいりゆうすい しみずく

青龍水の清水汲み

ちや せん いのちうるお

お茶を煎じて命潤す

盛岡市 西川 政勝

生きづらく^い

まさ やさ

あれども勝る優しさと

しんせつ ふ よ いちにち

親切に触れ良い一日に

愛知県丹羽郡 清水 将一

稜線の
りようせん

くつきり見ゆる岩手山
み いわてさん

その麗しき姿誇りぬ
うるは すがたほこ

青森県青森市 鈴木 操

硬質の寒さの似合ふ
こうしつ さむ にあ

盛岡に凍て道滑るも
もりおか い みちすべ

はしやぎて子らは
こ

盛岡市 工藤 由美子

優し気な模様は映えて
やさ げ もよう は

職人の自負が漂う
しよくにん じふ ただよ

南部鉄瓶
なんぶてつびん

盛岡市 河野 康夫

名水の
めいすい

冬温かく湧く水を
ふゆあたた わ みず

若水として新年祝う
わかみず しんねんいわ

盛岡市 堀米 公子

令和元年冬の部

ひめかみ とんが やまふゆく

姫神の尖りお山冬来れば

しろ

白いピラミッド

そび

聳えるごとし

盛岡市 小林 貴史

とし

年あけて

おねたかな

はっこてん

胸高鳴りぬ初個展

とも

きちよう

旧友かけつけて記帳するなり

盛岡市 赤坂 昌信

ゆきいだ

雪抱き

たか

いわてさん

ひとときわ高し岩手山

たび

わたし

みまも

ごと

旅ゆく私を見守る如く

栃木県佐野市 小林 トシ子

令和元年冬の部

冬の部へジュニア部門へ優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

盛岡の冬を上手く捉え、詠まれた歌が多かったと思います。冬は雪を素材に詠うことも多いのですが、よく見れば歌の素材は様々あります。視点は個性となって現れます。自分にしか見えないところを見つめることが大切です。

令和二年三月選 冬の部

投稿数 八十一首

選者 赤澤 篤司

令和2年冬の部

『もりおかの短歌』冬の部

一般部門 優秀賞十首

とも の
友と呑み

むかしはなし よ

昔話で酔いまわる

はちまんうら のれん おく

八幡裏の暖簾の奥で

盛岡市 赤坂 昌信

リハビリの

さんぽ すこ

な

散歩も少しづつ慣れて

はくちよう

たかまつ いけ

白鳥うたう高松の池

秋田県大仙市 鈴木 仁

いせい なま こえ

威勢よき訛りの声に

しゅん か げんき もら

旬を買い元氣も貰う

みこ だあさいち

神子田朝市

盛岡市 河野 康夫

ほんしゅういちさむ やぶがわ
本州一寒い藪川

ふゆ ひ や よ
冬の日にそば屋に寄りて

あつ そばく
熱い蕎麦食う

盛岡市 小林 貴史

ゆ たぎ おと とも
湯の滾る音も友なり

ひと す
独り棲み

なんぶ てつびん な い
南部鉄瓶撫づりて生きる

青森県青森市 鈴木 操

やがすり はかま
矢絣と袴ですべるスキーには

いっぽん たけ
一本の竹

めいじ つた
明治を伝えし

盛岡市 堀米 公子

わたゆき かいうんばし とも ひ
綿雪の開運橋に点る灯に

おとぎほろばしや
御伽幌馬車

わた み
渡り観るよな

釜石市 中嶋 多喜子

コロナ禍で孫達か まごたちはもう盛岡もりおかに

来れぬと知しって

そぞろ歩あるきす

盛岡市 中島 久光

しとねもの

クルミにあずき ごまにみそ

昔むかし変わらぬ ふるさとの味あじ

盛岡市 新里 秀明

おでんせの響ひびき温ぬくしや

郷訛さとなまり

妣ははに似にていし姉あねさん被かぶり

宮城県多賀城市 小松 隆夫

令和2年冬の部

冬の部へジュニア部門へ

優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

それぞれの冬。今を生きる吐息が歌となって溢れ落ちたのだろう。コロナ禍と言われる時代も長い人生を振り返ってみればほんの一瞬の出来事なのかもしれない。それはまるで開運橋に点（とも）る灯に過ぎて行った御伽（おとぎ）幌馬車のように。

令和三年三月選 冬の部

投稿数 七十一 首

選者 山本 玲子

令和3年冬の部

『もりおかの短歌』冬の部

一般部門 優秀賞十首

もりおかの石割桜 いしわりざくら

真っ白き雪の華つけ ましろ ゆきはな

遠き春待つ とお はるま

盛岡市 鈴木 充

萌え初めし通りの空の大柳 も そ とお そら おおやなぎ

誘われ来れば さそ く

啄木の家 たくぼく いえ

盛岡市 佐藤 忠行

年尾の忌 としお き

迎へるたびに想ひ出す むか おも だ

盛岡去りし七年前を もりおかさ ななとせまへ

青森県青森市 鈴木 操

モノクロの景色けしきの中なか

つらら越ごし

道みちゆく人ひとの眼鏡めがねも曇くもる

盛岡市 赤坂 昌信

雪搔ゆきかきで始はじまる朝あさを

運命うんめいと思おもひて

しばし冷氣れいきす吸こい込こむ

盛岡市 中島 久光

積つむ雪ゆきの下したで芽吹めぶく日ひ

待まつ樹々きぎにやさしき陽ひざし

盛岡もりおかに來きて

千葉県鎌ヶ谷市 山本 咲江

中津川なかつがわ

一晩ひとばんの雪ゆきふつくらと

小ガモこの朝餉あさげを見守みまもるように

盛岡市 郷家 美磨

はじ
初めてのさんさ踊りに
おど

みりよう

魅了され

むちゆう てびようしにさい むすめ

夢中で手拍子二歳の娘

岐阜県可児市 有田 峻

もりおか まち

盛岡のしばれる街を

きたかみ なが つよ

北上川の流れは強く

す ひとつよ

住む人強し

盛岡市 小林 貴史

とりわた しゅうほう しろ

白鳥渡り秀峰ま白にズームイン

きび ふゆ

厳しき冬は

まち つつ

街を包みぬ

盛岡市 堀米 公子

令和3年冬の部

冬の部へジュニア部門へ

優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

コロナ禍もワクチン接種がゆきわたり、平穏な日常に戻れることを疑わずにいたけれど、何かスツキリしない。人々の行動も消極にならざるをえない現実に関心が高まる。このたび皆様から届いた作品は65首と過去に例がない程の少なさ。ジュニア部門は1首もなく寂しい現実を直視した。北に帰る白鳥の群れを送りながら春の近いことを実感する。禍事のない春よ来い!!

令和四年三月選 冬の部

投稿数 六十五首

選者 松田 久恵

『もりおかの短歌』冬の部

一般部門 優秀賞十首

はあはあと吐く息荒い
は いきあら

雪はらい
ゆき

眼鏡はくもりマスクも凍る
めがね こそ

盛岡市 赤坂 昌信

雪積る枝に
ゆきつも えだ

小さき蕾もつ
ちい つぼみ

石割桜よ春にまた見ん
いしわりぎくら はる み

千葉県浦安市 岩田 一

雪しろき岩手山嶺
ゆき いわてさんれい

照りかへり山壁かげり
て やまひだ

夕暮れんとす
ゆうぐ

奥州市 遠藤 カオル

御所^{ごしよ}ダムの水面^{みなも}は

冬の山々^{ふゆ やまやま うつ}を映して

とても永遠^{えいえん}だった

北海道札幌市 小野寺 弘泰

時超^{ときこ}えて

希望^{きぼう}与えしSL^{えすえる}の

光輝^{ひかり}く冬の盛岡^{ふゆ もりおか}

盛岡市 川村 佳子

しらじらと明^あけくる空^{そら}に岩手山^{いわてさん}

雪^{ゆき}に耀^{かがよ}う

姿^{すがた}あらわす

盛岡市 櫻井 知意子

大雪^{おおゆき}のあと^{あおぞらひろ}は青空^{あおぞら}広が^{ひろ}りて

運命^{さだめ}と思^{おも}ひ

雪搔^{ゆきか}きをする

盛岡市 中島 久光

はらけい うぶゆ みず く いど
原敬の産湯の水を汲んだ井戸

しず
静かにたたずむ

ゆきつ にわ
雪積もる庭に

盛岡市 西川 政勝

たくぼく し こが ひび
啄木の詩に古賀メロデーー響きたり

じほうな まち
時報鳴る街

ゆき ふ つ
雪は降り積む

盛岡市 堀米 公子

じゅんぱく あさ ひか さそ
純白の朝の光りに誘われて

けさ あしむ
今朝も足向く

こずかた しろ
不来方の城

盛岡市 渡邊 定夫

冬の部へジュニア部門へ 優秀賞

(応募時、中学生以下に限る)

スキー場すべってみると
じょう

なめらかで雪がまるで
ゆき

そば粉のようだ
こ

東京都立川市 河田 心(十一歳)

手のひらの
て

光る結晶 姿変え
ひか けっしょうすがたか

御所湖の光つなぎたる雪
ごしよこ ひかり ゆき

東京都渋谷区 小久保 晴(十二歳)

【講評】

一般部門・ジュニア部門

ニューヨーク・タイムズが発表した「2023年に行くべき52か所」に、盛岡市がロンドンに次いで2番目に紹介され話題となっています。灯台もと暗し、という諺がありますが、今回の件はまさにそれを表した出来ごとです。短歌の素材も、これまで詠まれた以外にもまだまだ多くあると思います。「冬の部」に応募していただいた歌は、素材としては目新しいものではありませんが、作者の身に引き付けた歌が多く好感を持ちました。

令和五年三月選 冬の部

投稿数 七十二首

選者 山本 豊